

## 「洗礼者ヨハネの死」

2014年08月24日

マルコによる福音書6章14節～29節。

ヨハネは、エルサレム神殿の祭司ザカリアと妻エリサベトに与えられた一人息子である。将来、祭司になるように育てられただろう。ところが、成人したヨハネは神殿を捨て、荒れ野に立った。らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、旧約聖書の預言者エリヤのいでたちだった。いなごと野蜜を食物とし、極めて禁欲的だった。信仰の原点であった荒れ野に立ち、イスラエル人が最も尊敬する預言者エリヤの風貌で、厳しい禁欲生活をしつつ、罪の赦しを得させる悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。人々は、ヨハネの身を捨てた、真実で激しい説教に心を動かされ、続々と悔い改めの洗礼を受けた。ヨハネの宗教運動は大きな広がりを見せ、生ける神に心を向ける道が整えられた。この道が、主イエスの福音宣教の道備えとなった。ヨハネは、私の後に優れた方が来られ、私はその方の履物のひもを解く値打ちもない、私は水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになるとキリストの到来を預言した。そして、主イエスに洗礼を授けた時、聖霊が降り、主イエスは神の心に適う神の子であるという天の声を聞いた。彼はナザレのイエスをキリストとして、人々に指し示した旧約聖書最後の預言者の務めを果たした。

ヨハネは、当然モーセの律法に対して忠実であった。時の領主ヘロデは兄フィリポの妻ヘロディアを見初め、自分の妻とした。ヨハネは、レビ記18章16節の「兄弟の妻を犯してはならない。兄弟を辱めることになるからである」という律法に反するとして、ヘロデの結婚に抗議した。一介の野にあるラビの抗議に怒ったヘロデはヨハネを捕え、投獄した。ヨハネを殺そうとしたが、殺せないでいた。その理由を6章20節に「なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである」と書いている。「神の言葉」は、罪をリアルに告発し、耐え難い苦悩の中に投げ込むが、それでもなお、聞き続けたいと思わせる。ヨハネは、真実な「神の言葉」を語る説教者であった。

そのような時、ヘロデの誕生祝の宴会が持たれた。妻ヘロディアは、自分の娘に踊りを踊らせた。酒宴で踊ることは身分の低い女性のすることであった。王妃の娘の踊りに、酒に酔ったヘロデは上機嫌になり、欲しいものを何でもあげようと約束した。娘は母ヘロディアに相談すると、母は「洗礼者ヨハネの首を」と言い、娘はそれを、ヘロデに求めた。ヘロデは悩んだが、人前で誓った手前、衛兵に命じて、ヨハネの首を落とし、持って来させた。娘は受け取り、母ヘロディアに渡した。二人の結婚に抗議したヨハネを最も恨んでいたのはヘロディアであった。彼女の策略によって、ヨハネは無残な死を遂げた訳である。神への全き信従、律法への忠誠に生きたヨハネらしい最期であった。

ヨハネは後々まで、人々の尊敬を集めた。紀元後50年代、学術都市アレキサンドリア生まれの学者アポロはヨハネに心酔し、ヨハネを伝えていた。2世紀の始めに書かれたヨハネ福音書は、ヨハネに「あの方（主イエス）は栄え、わたしは衰えねばならない」と言わせ、ヨハネは消えゆく人間で、主イエスこそが崇められるキリストである告知している。ヨハネのことを思うと、心を熱くさせられる。ヨハネは神への真実を貫いたが、主イエスのような開放感はなく、息苦しい生涯を送った人であったと同情も禁じえない。